

「常陸国風土記」の「周辺」意識——比較文学的立場より——

加藤 有子

はじめに

『風土記』の「総記」とされる部分を改めて読む機会があった。四風土記を比較して（「播磨国」は「総記」が現存しない）。気づいたのが、「肥前国風土記」と「常陸国風土記」との関係である（以後「肥前国」「常陸国」と略す）。まず、「肥前国」の「総記」にある、

「臣、辱くも聖命を被りて、遠く西の戎を誅ふに、刀刃を露らさずて、梟鏡、自ら滅えぬ。威靈にあらざるよりは、何ぞ然あることを得むや」

に「西戎」に対し、「常陸国」の「総記」では、

倭武の天皇、東の夷の国を巡り狩はして、新治の県を幸過まししに、国の造毗那良珠の命を遣はしたまひて、新たに井を堀らしめしに、流るる泉淨く澄み、尤好愛しかりき。

とある「東夷」である。この二つの「総記」は対のごとく「西戎」「東夷」を用いている点が興味深い。

「西戎」は『風土記』中「肥前国」が孤例である。『日本書紀』『継体紀』（二十一年条）には「西戎の地」ほか、『日本書紀』に「戎」で五例、『懷風藻』に「戎蕃」一例ある。

それに対し、「東夷」は記紀万葉に七例ほど見られ、「夷」のみでは「蝦夷」など含め使用例は多い。また『万葉集』『天離 夷者雖有』（卷一・二九）などの用法もある。

このような中、「肥前国」「常陸国」の「西戎」「東夷」は、偶然生まれた記載であろうか。

また『風土記』中、「肥前国」と「常陸国」の二例しかない語がある。「梟」である。右の「肥前国」に「梟鏡、自ら滅びぬ」とあり、「常陸国」茨城郡には「狼の性、梟の情」とある。

「梟」は記紀万葉では『日本書紀』に「八十梟帥」「川上梟帥」などに用いられ、動詞「梟す（さらす）」と用いられている例がある。これらの「梟」の意味は何なのか。

本稿では「常陸国」の用語意識を中心に、「肥前国」「常陸国」の二風土記の「周辺」意識を確認したい。方法としては中国文学との比較から論じてゆく。和訓（えびす・えみし・ひな等）の問題は論旨が逸れるため省き、原文表記を意識して調査する。

一、「西戎」と「東夷」

前掲『風土記』に見える「西戎」「東夷」という語は、中国の中華思想が源流の語である。それらとの比較を示す前に、「常陸国」の「総記」にみられる「中央」と「周辺」意識についてあげたい。次に「常陸国」「総記」の冒頭部を引用する。

常陸の国の司の解。古老の相伝ふる旧聞を申す事。

国郡の旧事を問ふに、古老の答へてい日はく、古は、相

摸の国足柄の岳坂より以東の諸の梟は、惣べて我姫の国と称ひき。（中略）坂より已東の国を惣領めしめたまひき。時に、我姫の道、分けて八つの国と為し、常陸の国は、その一つに居ゑたまふ。

この冒頭部では、まず「我姫国」の場所を示し、そこを八つの国としたうちの一つを「常陸国」としたという。この部分の末尾傍線部にある「その一つに居ゑたまふ」の原文「居其一」に注目したい。この「居其一」は唐までの中国の文献には多用されていない。この「居」に関して新全集の頭注には、

据えおく。住まわせる。『礼記』王制に「度地以居民」。
『神武紀』即位前戊午年十月「雑居」の古訓、マゼスウ。

とある。更に『礼記』王制では、

凡そ民を居く、地を量りて以て邑を制す、地を度りて以て民を居く、地邑民居、必ず参ながら相得るなり。曠土無く、游民無く、食節あり、民咸其の居に安んじて、事を樂しみ功に勸み、君を尊び上に親しみ、然る後に學を興す。

とある。^(注1)これは「居」を「据えおく。住まわせる」と解釈するための資料である。これに加え、「居其一」として考えた場合、唐までの中国文献では大別して三つの傾向を見ることが出来る。一つ目は『老子』『象元第二十五』に見られる、

故に道は大なり。天は大なり。地は大なり。王も亦た大なり。域中四大あり。而して王も其^(注2)一に居る。

を受けた表現である。^(注2)『老子』における「居其一」は「道」「天」「地」とともに「王」もまたこの世界で「大なるもの」の一つを占めていると解釈される例である。

また『史記』『孟子荀卿列傳』における「居其一」では

先づ中國の名山・大川・通谷・禽獸・水土に殖する所、物類の珍する所を列し、因りて之を推して、海外の人の睹る能はざる所に及ぼし、天地剖判せし以來、五德轉移し、治各おの宜しき有りて、符應茲の若きを稱引す。以為く、儒者の所謂中國は、天下に於て乃ち八十一分して其の一分に居るのみ。中國をば名づけて赤縣神州と曰ふ。赤縣神州の内、自ら九州有り。禹の序する九州是れなり。州の數と爲すを得ず。中國の外に赤縣神州の如き者、九あり。乃ち所謂九州なり。是に於て裨海有りて之を環る。人民禽獸、能く相通ずる者莫し。一區の中の如

き者、乃ち一州と爲す。此の如き者九あり。乃ち大瀛海有りて其の外を環る。天地の際なり、と。(以下略)

とある。^(注3)騶衍の言う「儒者の所謂中國は、天下に於て乃ち八十一分して其の一分に居るのみ」は『史記』以降の文章に非常に多く引用され、『芸文類聚』なども引く。

「居其一」の唐までの中国の用例としては、この『老子』『象元第二十五』と、『史記』『孟子荀卿列傳』を汲んで作られた二系統の文が多い。もちろん、これら以外の用例もあり、それを三つ目の系統と言える。この三つの系統の中で、『常陸国』の「総記」を解釈する上で、この『史記』の用例は興味深い。該当部を再掲して比較すると、

「常陸国」「我姫之道、分為八国、常陸国、居其一矣」
『史記』『中國者、於天下乃八十一分居其一分耳』

となる。「常陸国」は我姫国を「八つに分けたその一つが常陸国である」とあるのに対し、『史記』では「中国とは天の下において八十分の一にしかすぎない」とある。「常陸国」「中国」ともに全体における八十分の一か八十分の一なのである。つまり(儒者の)考えていた中国は、実は「一部」にしかすぎないという『史記』に対し、「常陸国」も「一部」であることを記す。仮に「常陸国」筆者が『史記』を念頭に置

いていた場合、「常陸国」「総記」の冒頭は「中央」から「周辺」を見て、更にその「一部」であることを意識した導入であると言える。

「常陸国」「総記」では、つづく段に常陸国の地名発祥譚が記載されている。そのうち「或るひと曰へらく」に（再掲）、

A、倭武の天皇、東の夷の国を巡り狩はして、新治の県を幸過まししに、国の造毗那良珠の命を遣はしたまひて、新に井を堀らしめしに、流るる泉淨く澄み、尤好愛しかりき。時に、乗輿を停めて、水を甃で手を洗ひたまひしに、御衣の袖、泉に垂れて沾ぢぬ。すなはち袖を漬す義に依りて、この国の名と爲す。

とあり、「東夷」が使用される。この他に新治郡に用例がある。

B、古老の曰へらく、昔、美麻貴の天皇馭宇しめしし世に、東の夷の荒ぶる賊俗、阿良夫流尔斯母乃と云ふ。を平け討たむと為て、新治の国の造の祖、名は比奈良珠の命と曰ふものを遣はしめたまひき。この人罷り到りて、すなはち新しき井今も新治の里に存り。随時に祭を致す。を穿りしに、その水淨く流れき。すなはち井を治り

しを以て、因りて郡の号に著けたり。

また『風土記』逸文「陸奥国八槻郷」に「日本武の尊、東の夷を征伐むとして」（『古風土記逸文』）、「因幡国」に「昔、武内宿禰、平東夷」（『万葉緯』）とあり、いずれも同じく地名発祥譚である。更に「肥前国」の「西戎」の例も同様である（再掲）。

磯城の瑞籬の宮に御宇しめしし御間城の天皇のみ世に、肥後の国益城郡朝来名の峯に土蜘蛛打猴・頸猴二人あり、徒衆一百八十余りの人を帥ゐて皇命を拒捍み、肯へて降服はず。朝廷、勅して肥君等の祖健緒組を遣りて伐ちたまふ。茲に、健緒組、勅を奉りて悉に誅ひ滅しき。兼、国裏を巡りて消息を観察しに、八代の郡の白髮山に到りて日晚れて止宿る。その夜、虚空に火あり、自然に燎え、稍々に降下りて、此の山に就きて燎えし時に、健緒組、見て驚き恠しむ。朝廷に参り上りて奏しけらく、「臣、辱くも聖命を被りて、遠く西の戎を誅ふに、刀刃を霑らさずて、梟鏡、自ら滅えぬ。威靈にあらざるよりは、何ぞ然あることを得むや」とまをす。また、燎火の状を挙げて奏し聞ゆ。天皇勅曰りたまひしく、「奏せる事、曾聞けることなし。火の下りし国は、火の国と謂ふべし」と勅りたまふ。

ここでは、健緒組がツチグモ打猴・頸猴を征伐し、それを朝廷に奏上する際の言葉の中に「西戎」がある。「肥前国」の「西戎」はツチグモ打猴・頸猴らの徒衆を指す言葉である。

これらの地名発祥譚は主語・場所・時代は違うが、「中央」が「東夷」「西戎」を平らげようとする際に、地名が生まれるとする。

このような「東夷」「西戎」は先に示した『史記』の驍衍の謂う世界観とは別の「儒者における」世界観の内に含まれる。こちらは中国の多くの文献に見られる中華思想である。例えば『礼記』『王制』にも、

東方を夷と曰ふ、髪を被り身に文し、火食せざる者有り。

南方を蠻と曰ふ、題を雕み趾を交へ、火食せざる者有り。

西方を戎と曰ふ、髪を被り皮を衣て、粒食せざる者有り。

北方を狄と曰ふ、羽毛を衣て穴居し、粒食せざる者有り。

中国夷蠻戎狄、皆、安居・和味・宜服・利用・備器有り。五方の民、言語通ぜず、嗜欲同じからず。

とある。^(注4)唐までの文献は「周辺」地域の地理や風土を説明する際、このような「東夷」「南蛮」「西戎」「北狄」を用いている。

中国では古くは春秋時代頃、自分たち「中央」を「諸夏」「諸華」などと呼び、周辺の異民族を「夷狄」「戎狄」「蛮夷」などと呼んだという。^(注5)また、「異民族を外側から蔑視・差別する面と、異民族を征服・同化して内にとりこんでいく面がある」とされている。^(注6)

特に史書の「志」「伝」などにはこれら「東夷」「南蛮」「西戎」「北狄」を用いて記録しており、書きぶりは『風土記』を解釈する上で参考になる。例えば『梁書』『東夷伝』の(倭の条)に、

物産は略、儋耳・朱崖と同じ。地温暖にして、風俗淫れず。

他にとあり、『隋書』『東夷伝』(倭の条)では、

氣候は温暖にして、草木は冬も青く、土地は膏腴にして、水多く陸少なし。

などある。使用例はこれらに限定されないが、右は「常陸国」「総記」の最終段にある、

謂はゆる水陸の府蔵、物産の膏腴なるくになり。古の人、常世の国と云へるは、蓋し疑はくはこの地ならむか。

につながる例としてあげてみた。右の『梁書』『隋書』は「東夷」の一国として倭国の風土について述べた部分である。この他にも中国の史書では「倭」国は「東夷」の中の一国ではない。また、積極的に「平討」「討」される対象としての記載ではなく、「東方に住む異民族」程度の書きぶりである。

「常陸国」「肥前国」の筆者もこれらの史書は当然学んでいたはずである。その上での記載と見るべきだろう。

ところが、「常陸国」「肥前国」では、大和朝廷である「中央」から見て、「周辺」としての「常陸国」「肥前国」が「東夷」「西戎」のものではなく、そこに住む中でも「荒ぶる賊俗」「拒捍」む民（ツチクモ）に限定されている。『礼記』などにみる地理的な問題より微妙な違いがある。

本節では、「常陸国」の「周辺」意識について論じた。「常陸国」「総記」にある「居其一」の語から、常陸国が「周辺」国の一つにしか過ぎないことが強調される。更にその「周辺」である常陸国を「東夷」とするのではなく、常陸国の住民の中でもツチクモを「東夷」とする。それは「肥前国」の

「西戎」についても同様であった。「常陸国」「肥前国」では大和朝廷に従わない人々を、「異民族」的な扱いで記載したと言える。

二、「梟鏡」と「梟情」

本節では、冒頭にあげた「肥前国」の「梟鏡」と、「常陸国」の「梟情」とを中国の文献に見られる「梟」と比較して考察してみたい。

前述したように「肥前国」の健緒組が「土蜘蛛打猿・頸猿二人」を誅滅ぼした際、「虚空に火」を見て朝廷に奏言した言葉の中に「梟鏡」は記される（再掲）。

「臣、辱くも聖命を被りて、遠く西の戎を誅ふに、刀刃を霑らさずして、梟鏡、自づから滅えぬ。威霊にあらざるよりは、何ぞ然あること得むや」とまをし。

この部分を新全集の頭注によると「梟鏡」は、

悪鳥・悪獣のような族長。鏡は猿の通用。『漢書』郊祀志上「破鏡」の注に「孟康曰、梟鳥名。食母。破鏡、獸名。食父」。『神武紀』即位前戊午年九月の訓注に「梟帥、此二ハ多稽屢ト云フ」。タケルドモ。

とある。それに対し「常陸国」茨城郡の「梟情」は次のようにある。

古老の曰へらく、昔、国巢俗の語、都知久母。又、夜都賀波岐といふ。山の佐伯・野の佐伯在り。普く土窟を置け堀り、常に穴に居み、人の来るあらば、すなはち窟に入りて竄れ、その人去らば、更郊に出でて遊べり。狼の性、梟の情ありて、鼠のごとく窺ひ狗のごとく盗む。招き慰へらるることなく、弥、風俗に阻たりき。この時、大の臣の族黒坂の命、出で遊ぶ時を伺候ひて、茨蕨を穴の内に施き、すなはち騎の兵を縦ちて、急に逐ひ迫めしめき。佐伯等、常のごとく土窟に走り帰り、尽に茨蕨に繋りて、衝き害はれて疾み死に散けき。故れ、茨蕨を取りて、梟の名に着けき。

黒坂命によって「国巢（都知久母）」の「山の佐伯、野の佐伯」を逐ひ迫る際、その「山の佐伯、野の佐伯」がどんな性質であるかという文脈で「梟の情」がある。

大系はその前「狼の性」の部分の頭注に「性情を悪い鳥獸に比喩していう」とあり、「梟の情」に関する言及は無い。新全集は「狼性梟情」の頭注に、

『淮南子』要略「秦国之俗貧狼」の注に「狼、荒也」。
『説文』に「梟、不孝鳥也。梟、食母」。ともに悪獸惡鳥とされる。『和名抄』に「狼 於保加美」「梟 布久呂不」。

とある。また、「肥前国」の頭注では『日本書紀』の「梟帥」を指摘している。『日本書紀』当該箇所は、

・九月の甲子の朔にして戊辰に、天皇菟田の高倉山の巔に陟り、域中を瞻望みたまふ。時に国見丘の上に則ち八十梟帥有り。梟帥、此には多稽屢と云ふ。

・時に弟猾、又奏して曰さく、「倭国の磯城邑に磯城八十梟帥有り。又高尾張邑に或本に云はく、葛城邑なりといふ。赤銅八十梟帥有り。此の類皆天皇と距き戦はむと欲へり」

・冬十月の癸巳の朔に、天皇、其の嚴盆の糧を嘗し、兵を勅へて出でたまふ。先づ八十梟帥を国見丘に撃ちて、破り斬る。

とある。この「梟帥」の新全集の頭注には、

多くの、勇武な人の意。「梟」は強くて勇ましい意。『文選』卷四十一、李少卿「答蘇武書」に「梟帥」。

とある。ここで示される『文選』の「答蘇武書」は李陵の作で、李陵は匈奴と戦うものの降伏し、単于の女を妻にもったことと有名である。「答蘇武書」の「梟帥」は李陵と匈奴との戦いの叙述部分で用いられ、匈奴の將軍を指している。「答蘇武書」では、

然れども猶ほ將を斬り旗を奪り、追奔逐北し、跡を滅し塵を掃ひ、其の梟帥を斬り、三軍の士をして、死を視ること歸するが如くならしむ。

とあり、新釈漢文大系は「敵將」と通釈する。^(注7)

『日本書紀』の「梟帥」は「タケル」という和訓からも「強くて勇ましい」意と解せるが、表記として『文選』「答蘇武書」を考慮に入れた場合「敵対する匈奴の將軍」の意を含め持つことになる。

右であげた「八十梟帥」「磯城八十梟帥」「赤銅八十梟帥」はいずれも天皇に対して賊軍と解されており、『日本書紀』の「梟帥」は漢語でのあり方に従った表記と言える。

この「神武即位前記」「梟帥」も含め、「肥前国」「梟鏡」「常陸国」「梟情」に用いられる「梟」とは、そもそもどのような鳥を指すのであろうか。

「梟」を論じた著名な論文として中西進の「梟」がある。^(注8)

中西氏によると「フクロウ」は、ギリシアで「知恵の象徴」インドで「知性の神の聖神」、アイヌで「村の神」「死後の世界の象徴」などの扱いや、仁徳天皇と鳥祖信仰に触れる。これらは聖なる扱いである。それに対するエジプトやバビロンでの悪鳥としての扱い、中国では『詩経』『正字通』や『文選』賈誼「鵬鳥賦」などの例から「徹底的に悪い鳥とされる」とする。悪なる扱いである。中西氏はそれらを「シンボルが往々にして持つ両義性」と位置づけている。

これらの世界的な「フクロウ」の認識と比べ、記紀風土記の「梟」はどのような位置にあるだろうか。

「肥前国」の「梟鏡」は、「梟」と「破鏡」の二つの動物を合わせた語であるという。この二つの動物がわかりやすい用例として、『史記』「光武本紀」元年に

後、人、復た上書して言ふ有り、古は天子、常に春秋を以て解祠す。黄帝を祠るには、「の梟と破鏡とを用ひ、冥羊には羊を用いて祠り、(中略)と。祠官をして之を領せしむること其の方の如くし、而して忌の泰一の壇の旁に祠る。

とある(『史記』「封禅書」にも同文あり)。右の傍線部に関して「集解」(南宋・裴駰撰)は、

梟、鳥の名、母を食ふ。破鏡、獸の名、父を食ふ。黃帝其の類を絶へんと欲す、百物をして皆之を用ひ祠らしむ。破鏡は狐の如くして虎の眼。或は云ふ直に破鏡を用ふ。

とする。^(注9) どちらも親を食う悪獸とする。

また、「梟鏡」の用例は唐までの史書中にいくらかみられ、中でも『魏書』が最も多い。また「梟鏡」と同義の「梟鏡」も『魏書』他にある。それらの中でも、

- 1、双咸曰く「三虜跨僭し、寇旅殷強にして、豺狼梟鏡、目を擧ぐるは是なり。」^(『晉書』「苻登載記」)
- 2、史臣曰く「寶賁は恩に背き義を忘る、梟鏡其の心なり。此れまた戎夷は影狡輕薄常を事とする。

（『魏書』「蕭寶賁伝」）
3、檀讓席毗衆河の外を擁す。陳・韓・梁・鄭・宋・衛・鄒・魯、村落は梟鏡の墟と成り、人庶は豺狼の餌と爲る。^(『隋書』「高祖楊堅紀上」)

が参考になる。1の「豺狼梟鏡」は渤海や済北などの辺境諸国の王に關しての叙述である。2は齊の明帝の第六子・寶賁が「梟鏡」「戎夷」であると解せる。明帝の時代は血族同士の慘劇が荒れ狂う時代で「この王室の慘劇は、中国史上でも

すこしく異常である」という。^(注10) その寶賁を「母を食ふ」「父を食ふ」、「梟鏡」の心ようだとし、それを「戎夷」とする。3では「檀讓席毗」によって、広い範圍の村落が「梟鏡の墟」「豺狼の餌」となるという。

このうち1と3は「梟鏡」「豺狼」が並列である。「常陸国」で「狼性梟情」とする表現に近い。

右であげた用例を代表として、唐までの中国の用例における「梟鏡」は邪惡な意味合いに偏っている。また、「中央」からみて「周辺」諸国や「戎夷」などを同時に意味している。

次に「常陸国」「梟情」はどうだろうか。「梟情」の例は唐までの文献には管見にして見いだせない。非常に近い例として「梟心」がある。『晉書』「石李龍載記」に、

李龍は心德義に昧く、幼して輕險なり。羊質に豹姿を仮り、狼性に梟心を驕にす。始め怨懟を懷ひ、終に篡奪を行ふ。是に於いて驕を窮め、勞役繁興し、畚鍤相尋ね、干戈息あらず、刑政は嚴酷にして、誅夷を動見し、慄慄たる遺言、哀れみを求める地は無し。戎狄の殘獷、斯れ甚しきを為すや！

とみえる。「常陸国」「狼性梟情」が『晉書』には「狼性於梟心」とある。「情」と「心」はここでは解釈上に違はない。

右の石李龍とは、後趙（五胡十六国）を建てた石勒（高祖）の従子とも弟ともされる。「戎狄」とあるように、この石李龍も異民族の羯人である。^(註11)

「常陸国」の「狼の性梟の情、鼠に窺ひ、狗に盗みて」も『晋書』『石李龍載記』の「羊質に豹姿を仮り、狼性に梟心を騁にす」に近い。これから見て、「常陸国」の「梟情」は『晋書』『石李龍載記』を参考にしていた可能性がある。また、『晋書』の「梟心」も異民族の心情を指し示していることになる。

以上のような中国の使用例からみると、「梟帥」は匈奴、「梟鏡」は渤海や済北などの辺境諸国などの「戎夷」、「梟情（心）」は「戎狄」である羯人を指していることがわかった。つまり、唐までの使用例にみる「梟」は、政治の「中央」からみる「周辺」の異民族やその将に用いられていることが多く、また邪惡な性情で記される事も多い。

これらの中国の史書を学んでいた者が、日本の風土を記載する際、「中央」からみた「周辺」である肥前国と常陸国に住む、中でもツチグモを異民族的な存在として捉え、「梟鏡」「梟情」の語を選び取ったと考えられる。

また、従来の『風土記』の解釈では「梟鏡」「梟情」は「残虐さや悪い性質を指す」とされてきたが、より積極的に「周辺」地域の民族の性情を表す語としての解釈を加えるべきであることがわかった。

そして前節の「西戎」「東夷」、本節の「梟鏡」「梟情」を調査することによって、「肥前国」「常陸国」の筆録者は、双方が非常に近似した史書の教養を持つということがわかった。「周辺」を見つめる視点も非常に近い。

今後、別稿にて更に多くの単語を精査することで、この近似する教養と視点の問題をもう少し掘り下げてみたいと考える。

三、狼の性

本節では、前節で述べた「常陸国」の「狼性梟情」の「狼性」について補足説明をする。この「狼性梟情」の新全集の頭注では、つづく「鼠窺狗盗」も含めて、

「鼠」をヒソカニと訓む説もあるが、訓の明証を得ない。底本「掠」は「狗」の誤写であろう。狼・梟・鼠・狗と動物名を列挙し、性・情・窺・盗で内面と外面とを描く。

とある。動物を羅列する点を表現技巧としてとらえている。

この部分を大系頭注は「狼の性」で「性情を悪い鳥獸に比喩していう」とあり、新全集頭注は「狼性」の頭注で、

『淮南子』要略「秦国之俗貧狼」の注に「狼、荒也」。
（中略）ともに惡獸惡鳥とされる。『和名抄』に「狼 於
保加美」（略）。

とする。このように大系・新全集ともに「性情を悪い鳥獸」
「惡獸惡鳥」と解釈する。しかし中国では「狼」も別に聖視
される一面もある。前掲中西氏に「シンボルが往々にして持
つ両義性」という言葉があるが、「狼」に関しても同様であ
る。

例えば『春秋左氏伝』閔公元年には「戎狄は豺狼にて、厭
ふべからざるなり」ともある。^{（注12）}ここでは異民族である「戎
狄」は「豺狼」のようなものだという。「豺狼」は「やまい
ぬとおかみ」のこと。熟語として使用する場合は姦人や奸
惡な者、また辺鄙な場所を意味する事もある。

このようなマイナスイメージに対して、「北狄」とされる
突厥は特に「狼」を聖視するという。「狼」は突厥の始祖と
され、史書に伝承が多く残されている。特に『周書』『隋書』
（『北史』）などに詳しい。うち『隋書』『北狄伝』には、

突厥の先は、平涼の雜胡也。姓は阿史那氏。（中略）或
ひは云ふ。其の先、国は西海の上に於いて、隣国の滅す
る所となり、男女少長無く之を殺し尽きぬ。一兒に至
り、殺すには忍びず、足を削り臂を絶ち大澤中に棄つ。

一牝狼有り、毎に肉を啣へ其の所に至り、此の兒因りて
之を食ひ、以て死なざるを得。其の後、遂に狼と交は
り、狼孕む有り。彼の隣国、復た人をして此の兒を殺さ
しむに、狼其の側に在り。使者、將に之を殺さんとす、
其の狼神の憑く所と為るごとく、歟然として東海に至
り、山上に止まれり。其の山高昌西北に在り、下は洞穴
有り、平壤にして草繁るに遇ひ得る、地方二百餘里。其
の後狼は十男を生み、其の一の姓阿史那氏、最も賢く、
遂に君長とす、故に牙門は狼頭纛を建つ、本を忘れざる
を示すなり。

とある。突厥の始祖は戦乱時、子供であったため足を切つて
棄てられる。その後牝狼にあい、食を与えられて生きた、い
わゆる「狼に育てられた少年」である。その後、その兒は狼
と交わり、兒をなし、その子孫は追つ手をのがれて広い洞窟
にて生きたとある。その狼の子が突厥の先祖であるという。
また、始祖を忘れないため、狼頭を象つた機を城門に立てる
といった伝えである。

ここには狼が「突厥」のトータルとしてあったことが記さ
れている。つまり、「狼」は史書に詳しい者からみると、「北
狄」「異民族」の「突厥」を想起させる語でもあった。

そして、日本においても「狼」は「両義性」をもって記さ
れている。『風土記』では右の「常陸国」以外に「その地に

棲む動物」の記録として何例がある。しかしその生態には触れられていない。唯一、逸文の「山城国」で「大口の神」(『枕詞燭明抄』)と記すのみである。

また、『日本書紀』「欽明即位前紀」では秦大津父が「二狼の相闘」うを見て「汝は是貴き神にして」と告げる場面があり、ここでは「狼」を聖視している。

しかし同じ『日本書紀』の「雄略紀」五年では舍人を斬った雄略天皇を「譬へば豺狼と異なること無し」と記し、また新羅を指して、「狼子の野心」(雄略紀九年)・「豺狼交接れり」(欽明紀二十三年)などもする。右の欽明紀二十三年では他に新羅に対して「西羌」とする記載もある(西羌は西戎のうちの一種族―『説文』より)が、大和朝廷を「中央」と見て新羅を「周辺」国と位置づけたい『日本書紀』の意識であろうか。

このように「常陸国」の「狼性」という語も、従来説の「残虐さや悪い性質」に加え、「中央」から「周辺」民族を見る視点が加わることになる。

加えて、「常陸国」「狼性梟情」につづく「鼠窺狗盜」の四字句は中国の正史に頻出し、異民族を意味する例も多い。特に『隋書』「劉行本列傳」では、

臣聞く南蠻は校尉の統を違ひ、西域は都護の威を仰ぐ。比べ見て西羌は鼠窺狗盜にして、父あらず子あらず、君

無く臣無く、異類殊に方し、斯に於いて下らんとす。

とあり、「西羌」を「鼠窺狗盜」とする。これらの中国の正史の流れを汲んだ上で、「常陸国」「鼠窺狗盜」も記されていると言える。

本節では、「梟情」の補足説明として「狼の性」「鼠のごと窺ひ狗のごと盜む」を比較文学的に考察した。『隋書』「北狄伝」の突厥とトートテムとしての「狼」の関係や、『日本書紀』の「狼」を例示した。それから、「狼の性」「鼠のごと窺ひ狗のごと盜む」とともに「中央」から「周辺」の異民族を見る視点が確認できた。

おわりに

本稿では『風土記』「常陸国」を中心にして比較文学的な用語解釈を示した。

第一節では「常陸国」における「中央」と「周辺」意識を確認した。冒頭段落の「居其二」や次の段落にある「東夷」などの語、加えて「肥前国」の「西戎」などの語を解釈した。

第二節では「常陸国」の「狼性梟情」が『晋書』石季龍載記の「狼性於梟心」が最も近いとした。「肥前国」「梟鏡」や「常陸国」「梟情」は単に残虐さや悪い性質を指すのみでなく、「周辺」の異民族の性情も積極的に意味していた。

第三節では補足として「常陸国」の「狼性」と中国の例との比較を行った。中国の史書では「狼」は突厥の始祖とされる。「狼」も「異民族」の印象が強い語であった。

中国では、史書の記述はひろく前代までの文献を学び、その表現を踏襲している。「常陸国」筆者はそのような史書の踏襲を学んだ者であると推測できる。「常陸国」の記載もそのような教養のからうまれたと言えよう。

〈注〉

※本稿は、成城大学名誉教授・山田直巳氏の指導による「常陸国風土記」研究会での成果を踏まえ、再調査し、まとめたものである。山田氏のご指導に感謝の意を表したい。

※『風土記』は植垣節校注・訳の新編日本古典文学全集『風土記』（小学館）を用いた（新全集と略す）。また小島憲之編・古典文学大系『風土記』（岩波書店）の引用は大系と略した。また注の引用に『日本書紀』は新編日本古典文学全集『日本書紀』（小学館）を用いたがそれぞれに注は施さなかった。

※引用した『史記』『晉書』『梁書』『魏書』『隋書』は全て中華書局本を用いた。その他参考とした中国の史書は注を付さない場合は中華書局本である。また台湾の中央研究院のデータベース「漢籍電子文獻資料庫」の検索結果を参考にした。

※中国の史書の訓読は、古典研究会『和刻本正史』（汲古書院）の訓点を、また、解釈として藤堂明保・竹田晃・影山輝國『全訳注倭国伝』（講談社）も参考にした。

※秋本吉徳『風土記の研究』（ミネルヴァ書房）・同『常陸国風土記

全訳注』（講談社）を参考にした。

〈注〉

- (1) 武内照夫著・新釈漢文大系『礼記』（明治書院）
- (2) 阿部吉雄・山本敏夫著・新釈漢文大系『老子・荘子上』（明治書院）
- (3) 水沢利忠著・新釈漢文大系『史記』九（列伝二）（明治書院）
- (4) 注（1）に同じ
- (5) 堀敏一著「中国民族と中華思想の形成」『中国通史』（講談社）※内容を一部省略して記した。
- (6) 諸橋轍次『大漢和事典』（大修館書店）
- (7) 『文選』（中華書局）には「臯帥」とある。ただし竹田晃著・新釈漢文大系『文選』（文章篇）中（明治書院）では本文「臯師」をとる。本稿では中華書局本の本文を用い、書下しと解釈の参考として新釈漢文大系を用いた。
- (8) 中西進「臯」『文学』第7巻・第4号（岩波書店）
- (9) 吉田賢抗著・新釈漢文大系『史記』二（本紀）（明治書院）
- (10) 川勝義雄著『魏晉南北朝』（講談社）
- (11) 孟慶遠『中国歴史文化辞典』（新潮社）
- (12) 鎌田正著・新釈漢文大系『春秋左氏伝』一（明治書院）
- (13) 「雄略紀」において諸注指摘する「魏志」呂布伝の「布狼子野心」を参考にした表現である。この呂布も五原の九原（今の内モンゴルの包頭の西北）出身者であるという
- (14) 「鼠窺狗盜」の用例は『隋書』までの史書に十数例見受けられる。『漢書』『酈陸朱劉叔孫列傳』以下あり。